「二・二六事件と岡田啓介内閣」　メモ

●日本陸軍、始まって以来の大規模な反乱事件
▽昭和11年2月26日早朝　大雪の帝都で
　皇道派青年将校が率いる　1483人
　完全武装の大部隊が　首相官邸　政府要人を襲撃
▽斎藤実（内大臣）　高橋是清（蔵相）　渡辺錠太郎（教育総監）
　松尾伝蔵（岡田啓介首相の義弟、退役陸軍大佐）　4人が殺害され
　　鈴木貫太郎（侍従長）が　瀕死の重傷を負った
▽「昭和維新断行」を旗印に　三宅坂（陸軍省、参謀本部）から
　永田町（首相官邸、国会議事堂）一帯を　占拠
　「尊皇討奸」の幟を立て　戦闘態勢を取った
▽交通は遮断され　政治・経済の中枢は　マヒ状態
▽29日の反乱鎮圧まで　日本中を震撼させた4日間

陸軍当局発表以外は、何も書けず喋れず

午後になって事件の全貌が明らかになり、読売新聞は号外を発行したが、即刻頒布禁止。東京朝日新聞は襲撃されて活字ケースが引っ繰り返され、夕刊発行は不可能。他の新聞も夕刊を見送っている中、東京夕刊新報がただ1紙発行したが発売禁止、新聞もスタンドから押収。

岡山県の中国民報（現山陽新聞）は、一面トップ8段で社説「明治維新と昭和維新　国民の省察を望む」を掲載して軍部批判をしたが、肝心な箇所は検閲で全て削り取られ、判読不能だった。

●国民の誰もが「何か大変な事が起こっている」
▽ある程度　事件を知ることが出来たのは
　襲撃（午前5時）から　14時間も経った　夜の7時
▽ラジオが　東京警備司令部発表
　「本日午後三時第一師団管下
　　戦時警備ヲ下令セラル」を　放送した

●陸軍省が、事件を初めて発表したのは夜8時15分
▽これほど　陸軍上層部の混乱と
　無能ぶりを　さらけ出した発表も　なかった

陸軍省発表（26日午後8時15分）

「本日午前五時ごろ一部青年将校らは左記箇所を襲撃せり。首相官邸（首相即死）斎藤内大

岡田　啓介（おかだ・けいすけ）
明治1（1868）～昭和27（1952）　福井県生まれ。海軍大将。海軍次官を経て大正13年連合艦隊司令長官。昭和2年田中内閣海相。軍事参議官の時、ロンドン海軍軍縮条約締結に尽力し7年斎藤内閣海相。9年首相に就任し二・二六事件で襲撃されたが、危うく難を逃れる。太平洋戦争中、重臣として終戦和平に力を注ぎ、東条内閣を打倒。著に「岡田啓介回顧録」

斎藤　実（さいとう・まこと）
安政5（1858）～昭和11（1936）　岩手県生まれ。海軍大将。海軍次官を経て明治39年西園寺内閣海相。5代の内閣で海相を務め、大正3年シーメンス事件（軍艦建造をめぐる汚職事件）で予備役。8年朝鮮総督。昭和4年再び朝鮮総督。7年首相に就任し満州国承認、国際連盟脱退を行なう。10年内大臣となり、二・二六事件で暗殺される

高橋　是清（たかはし・これきよ）
安政1（1854）～昭和11（1936）　江戸生まれ。仙台藩留学生として渡米、苦学して帰国。明治20年初代特許局長。日銀副総裁の時、日露戦争の外債募集に成功。日銀総裁を経て大正2年山本内閣蔵相。原内閣蔵相となり10年原暗殺で首相兼蔵相、政友会総裁。昭和2年田中内閣蔵相、金融恐慌を収拾。満州事変後は犬養、斎藤、岡田内閣蔵相。二・二六事件で暗殺

渡辺　錠太郎（わたなべ・じょうたろう）
明治7（1874）～昭和11（1936）　愛知県生まれ。陸軍大将。第7師団長、台湾軍司令官などを歴任し昭和10年教育総監。二・二六事件で統制派の頭目と見做され、皇道派青年将校に私邸で殺害される

臣私邸(内大臣即死) 渡辺教育総監私邸(教育総監即死)牧野前内大臣宿舎(湯河原伊東屋旅館・牧野伯爵不明) 鈴木侍従長私邸(侍従長重傷)高橋大蔵大臣私邸(大蔵大臣負傷) 東京朝日新聞社 これら将校の蹶起せる目的は、その趣意書によれば、内外重大危急の際、元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政党などの国体破壊の元兇を芟除(さんじょ)し、以て正義を正し、国体を擁護顕現せんとするにあり」

▽反乱を 反乱と断定できず 反乱軍を「蹶起部隊」
「蹶起趣意書によれば」と
陸軍省が 反乱軍の宣伝を しているようなもの
▽「蹶起部隊」は「騒擾部隊」に代わり
3日目の28日になって ようやく「反乱部隊」に

●34歳の昭和天皇は、終始一貫「反乱軍を鎮圧せよ」
▽二・二六事件は 皇道派・統制派の派閥抗争が
その頂点に達して 爆発したもの
▽陸軍に 粛軍を徹底させ 政治介入を止めさせる
絶好のチャンスだったし 最後のチャンスでも
▽結果は 全く 逆になった
▽陸軍の主導権を握った 統制派幕僚グループは
「このような事件が起こったのは、従来の政治に対する軍部の不信があったからだ」
▽遠慮なく 政治的な発言を するようになり
陸軍主導の国家体制 軍部独裁の踏み台を作る
▽皇道派のクーデターを 利用した
統制派の「逆クーデター」では なかったのか
▽軍部の力は 誰にも止められないほど
強大なものとなり 支那事変 太平洋戦争へ

●反乱軍の中心は、第1師団(東)歩兵第1連隊、第3連隊、近衛師団近衛歩兵第3連隊
▽首相官邸を 襲撃したのは
栗原安秀中尉率いる 第1連隊の300人
▽栗原は 連隊本部兵器係軍曹に 拳銃を突き付け
衛門の衛兵司令に連行 弾薬庫の鍵を出させた
▽午前3時半過ぎ「起床、出動」の号令
大雪の営庭に 機関銃・小銃 各9個分隊が整列

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)
慶応3(1867)～昭和23(1948) 千葉県関宿藩代官の子として大阪・和泉生まれ。海軍大将。人事局長、次官を経て大正13年連合艦隊司令長官。14年軍令部長。昭和4年予備役に編入、侍従長。二・二六事件で瀕死の重傷。15年枢密院副議長、19年同議長。20年4月首相に就任し聖断により戦争終結。著に「鈴木貫太郎自伝」

2月26日を決行日としたのは
皇道派青年将校の拠点である第1師団の「3月満州派遣」が決まったから。
満州へ行ってしまえば、皇道派は四分五裂となり国家改革運動も雲散霧消してしまう。前夜の25日夜は第1連隊で山口一太郎大尉、第3連隊で安藤輝三大尉と、皇道派将校が週番司令。「夜の連隊長」と言われたくらい、夜間は連隊長と同じ権限を持っていて大部隊を動かすには絶好だった。

安藤 輝三(あんどう・てるぞう)
明治38(1905)～昭和11(1936)石川県生まれ。陸軍大尉。皇道派青年将校のリーダーとなり、歩兵第3連隊中隊長として二・二六事件で鈴木侍従長を襲撃、重傷を負わせる。軍法会議で死刑

栗原 安秀(くりはら・やすひで)
明治41(1908)～昭和11(1936)佐賀県生まれ。陸軍中尉。戦車連隊を経て昭和10年歩兵第1連隊勤務。国家改造運動の急進論者で、二・二六事件では機関銃隊を率いて首相官邸襲撃。軍法会議で死刑

蹶起趣意書
謹ンデ惟ルニ我ガ神州タル所以ハ、万世一神タル天皇陛下御統御ノ下ニ挙国一体生々化育ヲ遂ゲ、終ニ八紘一宇ヲ完フスルノ国体ニ存ス。今ニ

▽栗原は 蹶起趣意書を読み上げ
「これから昭和維新を断行する。今暁五時を期して全国一斉に蜂起する。貴官らは一切憂いはない。我々に一命を預けろ。もし、誤っていた場合は、栗原が腹を切ってお詫びすればよい」
▽兵隊たちは 寝ぼけ眼の上 難しい漢文調
「直属上官の命令だから言われるままに従った」
白い襷を 十文字に 袈裟がけにした将校に
「何か、ただならぬものを感じた」
▽午前4時半「目標、首相官邸。これより首相官邸に向かって前進、出発ーッ」の号令で 兵営を出発

●首相官邸は、万全の備えをしていたが…
▽五・一五事件で 犬養毅首相が暗殺されから
官邸至る所に 非常ベルを取り付け
ボタンを押すと 警視庁にも 直通するように
▽庭の裏手には 崖下へ出る 脱出用の抜け道
▽最初の15分は 護衛警官(20人ほど)で防ぎ
15分後に 警視庁応援隊 30分後には
麻布の歩兵第3連隊が 出動する手筈に
▽その軍隊が 襲って来た
警視庁応援隊は 予定通り 駆け付けたが
重機関銃(7挺) 軽機関銃(4挺)に 引き返した

護衛警官は勇敢に戦った

殉職した4人は全員がピストルの弾を全弾撃ち尽くしていた。新聞にこのことが出ると、下町のおカッパの少女が、近くの交番に「正月のお小遣いを貯めたものです」と、50銭置いていった。警視庁には20万円の献金が寄せられた。
職務に忠実な、罪のない人まで殺した軍部テロに対する、国民の無言の抗議だった。

●午前5時頃、非常ベルが鳴り響いた
▽松尾大佐が「とうとう来ました」と 岡田の寝室に
▽松尾が 非常用の潜り戸を開けて 飛び出すと
パンパンと銃声 すでに 散兵線が布かれ
庭から逃げるのは 手遅れになっていた
▽岡田は 風呂場に隠れたが
松尾は 中庭に出たところを 撃たれた

シテ国体破壊ノ不義不臣ヲ誅戮(ちゅうりく)シテ、稜威(みいつ)ヲ遮リ御維新ヲ阻止シ来レル奸賊ヲ芟除スルニ非ズンバ、皇謨(こうぼ)ヲ一空セン。
茲ニ同憂同志機ヲ一ニシテ蹶起シ、奸賊ヲ誅滅シテ大義ヲ正シ、国体ノ擁護開顕ニ肝脳ヲ竭(つ)クシ、以テ神州赤子ノ微衷ヲ献ゼントス。皇祖皇宗ノ神霊冀(ねがわ)クバ 照覧冥助ヲ垂レ給ハンコトヲ。
麹町歩兵大尉 野中四郎 外同志一同

11年2月は雪の多い年だった

本では「部隊は前夜から降りしきる雪を衝いて出動した」映画やテレビでも赤穂浪士の討入りのように描かれていることが多いが、出撃の時、雪は降ってなかった。
2月4日が49年ぶりの大雪で通信・交通機関がマヒし、読売夕刊は「劇場やカフェーも男女の雑魚寝」と、写真入りで伝えている。23日は、早朝から降り始めた雪が一日中降り続いて夜には積雪35.5㌢。明治18年以来、51年ぶりの記録となった。26日朝は、この雪が消えずに12㌢ほど残っていた。
中央気象台の記録では、雪がまた降り出したのは午前8時過ぎだった。

犬養　毅(いぬかい・つよし)
安政2(1855)～昭和7(1932)岡山県生まれ。号は木堂。第1回総選挙以来、連続当選18回。護憲・普通選挙運動を推進、「憲政の神様」と称された。大正14年政界引退を表明したが、昭和4年政友会総裁に推され、6年首相。五・一五事件で暗殺

松尾は面倒見のいい人だった

岡田の妹と結婚していて、岡田が首相に就任すると、「どうしても面倒を見る」と秘書を買って出た。内閣嘱託

▽松尾の死体は 岡田の寝室に 運び込まれた
▽隣の居間の欄間には 岡田の額入りの写真
　顔の部分に 銃弾が当たり ガラスがヒビ割れ
　　見比べても よく分からない
▽岡田68歳 松尾61歳 年格好も近く
　官邸に 老人が2人もいるとは 思ってもいない
▽「これだ、これだ、仕止めたぞ」 岡田と思い込んだ

●女中の機転、憲兵の責任感が、岡田の脱出劇に

岡田は女中部屋に匿われた

寝巻一枚で飛び出したので、寒くて仕方がない。こんな姿で見つけられるのも嫌だと思い、近くに兵隊がいないのを確かめ寝室で袷に着替えて出て行くと、女中の秋本サク、府川キヌに出会った。「ご無事でしたか」と、女中部屋の押入れに入れ、周りに洗濯物を積み上げ、簡単には分からないようにしてくれた。

▽篠田惣寿(黙止顎)が 女中部屋に行くと
　二人が 押入れを背に きちんと 座っている
▽「危険だから、引き取ったらどうだ」
　「旦那様のご遺骸がここにある間は、
　　帰るわけにはいきません」 余りに真剣なので
　　不審に思い 唐紙を開けると 岡田を発見した
▽篠田は「今更殺すべきではないと
　思ったので、反乱軍には報告しなかった」
▽麹町憲兵分隊に戻り 小坂慶助曹長に報告すると
　小坂は 他言を禁じた上で 森分隊長と協議した
▽森は 小坂に 岡田救出を命じた
　「軍紀を取り締まるべき憲兵が、反乱軍の汚名を受けてはならない。とにかく陛下の信任厚い首相だし、人命救出は憲兵の任務である」

●小坂は27日午前10時頃、自分で岡田生存を確かめた
▽岡田に「閣下、もうしばらく辛抱して下さい」
　救出には 首相秘書官の協力が必要と 考えた
　それには 憲兵が味方だと 知らせねばならない
▽秘書官の福田 迫水久常が 遺骸を拝みに来ると
　「死体を見て、お驚きにならないように」
▽迫水が 布団をのけると 死体は 松尾だった

の辞令を貰い、無給の秘書だったが、喜んで官邸に寝泊りしていた。
事件直前、2月20日に総選挙があり、秘書官福田耕が福井県から立候補したので、応援演説に行って、前日の25日に帰って来たばかりだった。

福田　耕(ふくだ・こう)
明治21(1888)～没年不詳 福井県生まれ。東京市電気局に入り、事件当時、岡田首相秘書官。衆院議員、華中電気通信社長を歴任し、戦後は国際電電取締役

篠田が首相官邸にいたのは

陸相官邸の警備についていたが、銃声を聞いて首相官邸に飛び込んだ。兵隊に見つかり、栗原中尉から「出て行け」と怒鳴られた。「官邸には女中もいるし、貴重品もある。不届きな事が起こっては、軍の汚名になるから、保護する意味でいる」
栗原も「外部との連絡は、一切許さん。電話も使用してはならん」と条件付で許可してくれた。

小坂　慶助(こさか・けいすけ)
明治33(1900)～没年不詳 憲兵大尉。大正11年から終戦まで憲兵として勤務し事件当時は曹長、麹町憲兵分隊特高班長

迫水　久常(さこみず・ひさつね)
明治35(1902)～昭和52(1983)鹿児島県生まれ。岡田首相の女婿。大蔵省に入り昭和9年岡田首相秘書官。大蔵省総務局長、銀行保険局長歴任。その間企画院課長を務め岡田の東条内閣打倒工作に情報を提供。20年4月鈴木内閣書記官長に就任、終戦和平に尽力。27年自由党衆院議員。31年参院議員。池田内閣経企庁長官、郵政相。著に「機関銃下の首相官邸」

▽栗原中尉が「総理に間違いありませんね」
　ハンカチで 目を押さえ「間違いありません」
▽女中部屋に行き「怪我はなかったか」
　「お怪我はございませんでした」
　この敬語で 岡田が無事で 場所も押入れだと

●迫水はすぐ湯浅倉平(宮内大臣)に、岡田生存を伝えた
▽湯浅が 奏上すると「陛下も、それはよかった、
　岡田を一刻も早く安全な場所に移すように」
▽迫水が「近衛師団長に頼んだらどうか」
　湯浅は「師団長はきっと上の方の指揮を求める
　だろう。そうなった場合、あちらの部屋で…」
▽軍事参議官会議が開かれている 宮中東溜の間を
　指差して 「あそこに来ている将軍連は、
　　いったいどっちを向いているのか分かんぞ。
　　非常に危険だから、よく考えて見たまえ」

●焼香の弔問客に紛れ込ませ、脱出させることに
▽福田秘書官は 老人ばかり
　10人ほどを集め 自動車で 官邸に送り込んだ
▽小坂は 岡田を モーニングに着替えさせ
　マスクで口を覆い ロイド眼鏡をかけて
　　ソフト帽を 目深に かぶらせた
▽二人で 岡田を抱き抱えるようにして
　玄関に近付くと 小坂が 大声を挙げた
　「あれほど死体を見るなと言っておいたのに、
　　死体を見るから気分が悪くなるんだ」
▽玄関前に 待たせておいた 自動車に
　岡田を乗せ 反乱軍の囲みの中を 脱出した
　　27日午後1時半過ぎだった
▽内閣は 反乱鎮圧後 29日午後4時 岡田生存を発表

新聞界は言論の不自由さを痛感した

27日午前3時半、戒厳令(司法、行政が秩序を維持できない時、国民の権利の保障を一時停止し、軍事兵力で秩序を回復する)が布告され、新聞は戒厳司令部の管制下に置かれ、戒厳令は7月18日まで5ヵ月近くも続いた。その中で圧倒的強みを見せたのがラジオ。ＪＯＡＫ、東京第一放送は、天気予報、海外経済ニュース以外は平常の番組を中止、戒厳司令部発表に充てた。

湯浅　倉平(ゆあさ・くらへい)

明治7(1874)～昭和15(1940) 山口県生まれ。岡山、静岡県知事を経て大正12年警視総監。内務次官、会計検査院長を歴任し、昭和8年宮内大臣。11年二・二六事件後、内大臣となり、天皇側近随一の硬骨漢として軍部の無理押しに抵抗した

情けない海軍大臣

迫水は、宮中の閣議に来た大角岑生海相に海軍の協力を求めた。「総理の遺骸を引き取るため陸戦隊を官邸に入れて貰いたい。海軍の先輩という意味で、名分も立ちます」大角は「とんでもない。そんな事をして陸海軍の戦争になったらどうする」

迫水は決心して「実は首相は生きています。官邸のある所にいますが、一刻も早く救出したいので陸戦隊の出動をお願いしたのです」大角は迷惑そうな顔をして「君、僕はその話は聞かなかったことにしておくよ」

大角　岑生(おおすみ・みねお)

明治9(1876)～昭和16(1941) 愛知県生まれ。海軍大将。次官、第2艦隊長官を歴任し昭和6年海相。8年海相に再任、条約派追放人事を行なう。11年軍事参議官。中国出張中に飛行機事故で殉職

岡田の首相就任は昭和9年7月

満州事変、上海事変、五・一五事件に国際連盟脱退 ― 国際緊張が高まる中、英米協調派の軍人として、良識豊かな政治見識を買われた。

貧乏なので、組閣本部の新聞記者に振る舞うビールが出せず、ぶっかき氷で済ませた。真夏の親任式に、冬のモーニング、借り物のシルクハット。

朝日新聞は岡田生存を号外で「遭難者は別人 岡田首相生存す 義弟松尾

●岡田、鈴木の助かったことが、「一億玉砕」から救う

▽岡田は 淀橋の私邸に帰ると 拝謁を願い出た

▽憲兵司令官岩佐祿郎中将は「一死を以て護衛の任に当たります」自ら 車の助手台に座った

▽岩佐は 脳溢血で倒れ 半身不随だったが
事件勃発を 病床で聞いて「申し訳ない。自分が行って反乱軍を説得する」半蔵門で阻止され
「それでも天皇の軍隊か」と 悔しがったという

▽昭和天皇は 参内した岡田に「よかった」
岡田の方は 涙が溢れ出て 言葉にならない

▽侍従次長が 天皇の言葉を 伝えた
「岡田は非常に興奮して恐縮しているようだが、周囲の者が気を付けて、考え違いのことをさせないように」岡田は 感泣した

▽「いつかはまた、お役に立つこともあるだろう」
その機会は 昭和19年7月に やって来た

▽平成11年11月 迫水の「証言テープ」が 公開された

迫水の証言（国会図書館）

岡田は、「このまま戦争を続けていけば、日本は国力の最後まで使い果たし、徹底的に破壊されて、無残な滅び方をしなければならない。一刻も早く戦争終結を考えた方がいいが、東条英機首相は戦争一本槍で突っ走っているばかりだ」19年7月サイパン島が陥落すると、重臣を東条内閣打倒に結束させ、迫水に木戸幸一（内大臣）に根回しさせ、総辞職に追い込んだ。

空襲が激化して、岡田は疎開を勧められても「陛下が東京に居られる間は東京にいよう」と決めていた。20年4月、鈴木内閣が成立すると、迫水を内閣書記官長として送り込み、「戦争を止めるよう補佐しろ」 迫水は「鈴木も最初から終戦にする積もりで首相になったのだ」

●反乱軍の殺し方は、むごいものだった

有馬頼親が朝日新聞に書いている

有馬の姉が、斎藤実の養子に嫁いでいた。「実はベッドの上で、あぐらをかいていたが、兵隊の持っていた機関銃弾をあびて、ベッドの向う側へ落ちた。射手は、ベッドの上にかけ上が大佐と判明」と特報した。酒好きで知られていたから、「待合に行っていたから助かったんだ」こんな噂が流れ迫水は「打ち消すのに大変だった」

鈴木（侍従長）を救った夫人の一言

兵隊に囲まれ、鈴木が「静になさい。理由を話して貰いたい」「時間がありません。昭和維新のため、お命を頂戴します」「それなら止むを得ません。お撃ちなさい」鈴木が不動の姿勢で立った途端に発射され、頭や左胸に4発の銃弾を受けて倒れた。

「止め、止め」と連呼する中で夫人たかが「止めはどうかやめて頂きたい」将校が一人入って来て、「止めはやめろ」と命令し鈴木に敬礼した。夫人が「誠に残念なことを致しました。貴方はどなたですか」 将校は「麻布歩兵第三連隊第六中隊長安藤輝三」兵隊を集めると「気をつけッ、閣下に対して捧げ銃」と号令し、出て行った。

鈴木は、日清戦争で50トンの水雷艇で威海衛の清国艦隊を夜襲し、「鬼貫太郎」と謳われた歴戦の勇士だった。

東条　英機（とうじょう・ひでき）

明治17（1884）～昭和23（1948）東京生まれ。陸軍大将。次官を経て昭和15年近衛内閣陸相。16年首相に就任。陸相を兼務し憲兵による独裁体制を強化。19年2月参謀総長も兼務したが戦局悪化で総辞職。戦後拳銃自殺未遂。A級戦犯で刑死

木戸　幸一（きど・こういち）

明治22（1889）～昭和52（1977）東京生まれ。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任、15年内大臣。天皇側近の重臣として力を揮い、東条を首相に奏請。戦争末期は終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固。30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

り、床の上に倒れている実を掃射した。四十一発の弾丸が、検死のとき体内から発見された。高橋是清の場合は、もっとひどかった。撃たれた上に、首と、両腕と、両脚が、日本刀で切りはなされていたのである。

君側の奸を排すともいったが、排して後、かれらにとってよりよい国家ができたか。私は、二・二六事件は、革命などというようなものではなく、ただの人殺しか、強盗、強姦のたぐいだと思っている」

●高橋の7度目の蔵相就任は、昭和9年11月、80歳の時

▽岡田内閣蔵相には 藤井真信(熔)が就任したが 予算折衝で 過労から倒れ 辞職した

▽高橋は 岡田から「是非」と 就任要請された時 友人に 決意を 語っている

「もっと年齢が若くて、先へ行って御奉公が出来るというならば考えることもあるが、わしはもうこの年で先はない。今奉公しなければ奉公する時もない。最後の御奉公と思って入閣したのだ。わしはもうこのまま死ぬ気だ」

▽岡田も 回顧録に「私の内閣にとってこれほど大きな存在はなかった。私の一つの自慢だった」

▽入閣してからの高橋は 勇気凛々だった

▽「非常時、非常時」を宣伝する 軍部に対し

「軍部が勝手に非常時を作って、国民を扇動しているのだ。こっちの方がよっぽど非常時だ」

▽昭和11年度予算の編成で 陸軍の復活要求を

「予算というものは、国民の所得に応じたものを作らねばならぬ。ただ国防のみに専念して悪性インフレを引き起こし、財政の信用を破壊するようなことがあっては、国防も決して安定したものとはなり得ない」と 一蹴した

▽予算閣議でも 川島義之(麟太郎)を 手厳しく批判

「いったい軍部は、アメリカとロシアの両面作戦をやる積もりなのか。大体軍部は常識に欠けている。その常識を欠いた軍部が政治にまで嘴を入れるというのは言語道断、国家の災いだ」

▽皇道派青年将校は「高橋許せず、高橋消すべし」

有馬　頼親(ありま・よりちか)

大正7(1918)～昭和55(1980) 東京生まれ。作家。元農相有馬頼寧の三男。昭和29年「終身未決囚」で直木賞受賞

高橋は陸軍省発表では「負傷」

国民に人気のある大蔵大臣だから、社会的影響が大きいと死亡をしばらく伏せたのだ、という説があるが、社会的影響のはるかに大きい岡田首相は、最初から「即死」と発表している。

しかも高橋家の遺族は、葬儀も許されなかった。ドライ・アイスで遺体を保存したが、どうにもならなくなり、密かに荼毘にだけにして通夜をしたという。葬儀は1ヵ月後、3月26日に築地本願寺で行なわれたが、弔問の一般市民が次々と押しかけ、予定を1時間も延長した。

陸軍は、高橋を殺害したのが近衛歩兵第3連隊、天皇を守るべき近衛兵が天皇の重臣を殺したこと ― その衝撃を恐れたのではないだろうか。

藤井　真信(ふじい・さだのぶ)

明治18(1885)～昭和10(1935)徳島県生まれ。大蔵省主税・主計局長を経て昭和9年次官。7月岡田内閣蔵相に就任。予算折衝で過労から倒れ辞職、2ヵ月後病没

昭和天皇も高橋を愛された

高橋は就任の際「俺は病体で常にガスが所嫌わず出るから、宮中でのお儀式を一切ご遠慮する条件ならお受けする」と拝謁を遠慮していた。昭和10年夏、高橋が葉山の別荘で避暑中、葉山御用邸の天皇から、たびたび「遊びに来い」とお招きがあったが、高橋は遠慮して、腰を上げなかった。

閣僚が御用邸で2班に分かれ陪食に預かることになり、1班の内田信也(鉄

●元老西園寺公望は、坐漁荘（静岡県興津）で木戸幸一（内大臣秘書官長）の電話で叩き起こされた

▽静岡県警察部長官舎に 避難したが
高橋がやられたと聞いて 悲壮な面持ちで
「立派な人を…日本としては惜しい人を失った」

西園寺の嘆き

「自分は明治、大正、今上の三陛下にお仕えしてきた。申し上げにくいことだが、考えてみると、今の陛下はご不幸な方だ。陛下は一番聡明な方だと思うが、最近は有力な政治家がみんな殺されてしまい、陛下の側近に人なしの格好になっている」

▽原敬首相（大正10年11月） 浜口雄幸首相（昭和5年11月）
井上準之助前蔵相（昭和7年2月） 犬養毅首相（昭和7年5月）
みんな 議会政治 政党政治を 守るため
軍部と 敢然と戦ってきた 政治家だった

●陸軍の反乱事件としては、「竹橋事件」以来

竹橋事件

明治11年8月23日、竹橋の近衛砲兵第1大隊で263名の兵士が、給料ダウンや西南戦争の恩賞を不満として騒ぎ出し、大隊長、週番将校を斬殺した。鎮圧部隊に大砲、小銃で応戦したため陸軍は死刑53名の厳罰で臨んだ。

それまで軍を動かしていたのは太政官政府。シビリアン・コントロールだったが、軍の統帥を保てないと、12月5日、参謀本部を設置した。やがて統帥権独立、政治関与を招くことに。

▽反乱の形としては 兵隊だけによる「強訴」
五・一五も 海軍青年将校の 集団テロ事件
▽上に立つ将校が 自分の部隊を率いて反乱
兵隊は 上官の命令に 従っただけなのに
それが 反乱になるのでは
軍隊の根幹 命令・服従関係が 崩れてしまう

●多くの国民は、平安な日々を送っていた

野球も全盛時代を迎えていた

昭和9年11月、ホームラン王ベーブ・ルースな

道相）が「高橋は何分にも病中のことと て、ご遠慮申し上げております」 天皇は「是非一度、気安くして出てくれればいのに」と残念がる様子だった。高橋はこれを聞いて感激し、2班に加わったが、天皇は「おお高橋、よく来てくれたね。体はどうかい、よかったね」と心から嬉しそうだったという。

内田 信也（うちだ・のぶや）
明治13（1880）～昭和46（1971）茨城県生まれ。第1次大戦中、船舶1隻で神戸内田汽船を開業、大戦景気で財を為した。大正13年政友会衆院議員。昭和9年岡田内閣鉄道相。19年東条内閣農商相。公職追放解除後、27年衆院議員。吉田内閣農相

川島 義之（かわしの・よしゆき）
明治11（1878）～昭和20（1945）愛媛県生まれ。陸軍大将。第3師団長、朝鮮軍司令官、軍事参議官を経て昭和10年陸相。二・二六事件終結後に予備役編入

西園寺 公望（さいおんじ・きんもち）
嘉永2（1849）～昭和15（1940） 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相となり、陸軍の2個師団増設要求を拒否して総辞職。晩年は、最後の元老として国際協調に努め、後継首相を奏請

原 敬（はら・たかし）
安政3（1856）～大正10（1921） 岩手県生まれ。明治33年政友会創立に参加、逓信相、内相を経て大正2年政友会総裁。7年初の純政党内閣を組織し「平民宰相」と歓迎されたが、東京駅で暗殺される。政治史に貴重な「原敬日記」82冊を遺す

浜口 雄幸（はまぐち・おさち）
明治3（1870）～昭和6（1931）高知県生ま

ど米大リーグ選抜チームが読売新聞の招きで来日、4日の第一戦は6万の群衆が詰めかけた。日本選手は三振の連続、8回まで外野へ飛球が飛ばないほど、力の差は大きかったが、ルースは16試合で本塁打13本、打率4割8厘。日本のファンをしびれさせたし、20日には静岡・草薙球場で沢村栄治投手が本塁打1本、1対0で惜敗し今も語りぐさになっている。12月26日、職業野球団「大日本野球倶楽部」設立総会が開かれ、現巨人軍の誕生となった。

▽昭和11年に入ると 大相撲春場所(1月11日から)は
　前夜から 徹夜で 数百名が並び
　　午前10時には「札止め」の盛況
▽映画館や 帝劇 日劇も 連日「満員御礼」
▽21日には 諏訪根自子の「渡欧の夕」が
　日比谷公会堂で開かれ 超満員だった
▽まさか あんな大事件が 起ころうとは
　誰もが 夢にも 思っていなかった

●派閥抗争の源流は、昭和初めの陸軍大学校閥誕生
▽明治・大正の陸軍を 動かしてきたのは 長州閥
▽陸軍の大御所 山県有朋が 君臨している間は
　要職は 長州か その系列で 独占してきた
▽反発はあっても 陸軍の統制は とれていた
▽山県の死(大正11年2月)と共に 新しい動きが

バーデン・バーデンの密約

大正10年10月、南ドイツの温泉保養地バーデン・バーデンに、3人の少佐が集まった。陸士16期の三羽烏と言われた永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次。第1次大戦後のヨーロッパを見た彼らは、戦争がそれまでの戦争と違って、国家の総力を挙げての総動員戦争になっていることを実感していた。日本もそうした戦争に、勝ち抜く体制を作らなければダメだ。それには、長州閥打破、陸軍人事の刷新を申し合わせた。

この盟約には、ライプチッヒに留学中の東条英機(17期)も加わり、帰国して「二葉会」を作ると、陸大から徹底して長州出身を締め出した。

れ。蔵相、内相を歴任。昭和2年民政党総裁。4年首相に就任、金解禁を断行、ロンドン海軍軍縮条約締結。「統帥権干犯」と非難され東京駅で右翼に狙撃される

井上　準之助(いのうえ・じゅんのすけ)
明治2(1869)～昭和7(1932)大分県生まれ。日銀総裁を経て昭和4年浜口内閣蔵相。金解禁を実施。血盟団に射殺される

ベーブ・ルース(Babe Ruth)
1895～1948 米大リーグ選手。1927年に年間本塁打60本の記録を樹立、通算714本の本塁打記録を残す

沢村　栄治(さわむら・えいじ)
大正6(1917)～昭和19(1944) 三重県生まれ。京都商投手として春の選抜、夏の甲子園大会で活躍。日米野球に選ばれ、巨人軍入団。昭和12年(春季リーグ)24勝4敗1分で最高殊勲選手。再三召集され、台湾沖で戦死した。背番号14は永久欠番

諏訪　根自子(すわ・ねじこ)
大正9(1920)～　東京生まれ。バイオリニスト。本名大須賀根自子。大正14年から小野アンナなどに師事、昭和7年初リサイタルで将来性を注目された。11年1月ベルギー留学。20年帰国し、洗練された演奏と美貌は熱狂的な歓迎を受けた

山県　有朋(やまがた・ありとも)
天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治6年陸軍卿となり徴兵令を制定。11年参謀本部長。22年首相。枢密院議長を経て日清戦争で第1軍司令官。31年第2次内閣で軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争で参謀総長。元老として政界、陸軍に君臨した

▽昭和4年5月「二葉会」は「一夕会」(いっせきかい)に
42人全員が 陸大出 優秀な成績で卒業
陸軍省 参謀本部 教育総監部の
部課長クラスを集めた 超エリート集団

「一夕会」の申し合わせ事項

第一は人事の刷新。長州閥は山県の死と共に凋落し、陸相宇垣一成の全盛時代。宇垣体制の打破を目指した。二つ目が満蒙問題の解決。三つ目は、宇垣閥から外れている荒木貞夫、真崎甚三郎、林銑十郎の三将軍を守り立て、正しい陸軍を再建すること。

▽満州事変(昭和6年9月)が 成功したのも
中央で 職務権限を握る「一夕会」会員が
石原莞爾中佐(関東軍作戦主任参謀)を 助けたから

●「一夕会」分裂は、荒木の陸相就任(昭和6年12月)から
▽陸軍中枢を 自分の息のかかった者で 固めた
▽参謀総長に閑院宮 次長には真崎を据え
参謀本部の実権を 握らせた

皇道派と統制派

荒木が盛んに天皇中心の国家体制を唱えて、やたらと「皇国、皇道、皇軍」を連発し、荒木、真崎一派を皇道派と呼ぶようになった。

荒木は講演会向きの人で、自分がやると息巻いていた政策も実行できず、永田も見限る。永田は、日本が急がなければならない問題は、国家総力戦のための高度国防体制を作り上げること。それには陸軍が統制を保ち、陸軍大臣の政治的発言力を強めて、国政に反映させる。官僚や政財界とも連携し、国家総動員体制、統制経済体制にしなければ、と考えていた。

永田の周りに、東条はじめ、富永恭次、武藤章ら、後に東条体制を支える中堅幕僚が集まり、統制派と呼ぶようになった。

▽「一夕会」分裂を決定的にした 永田・小畑の対立
▽小畑は 昭和7年 参謀本部第3部長(運輸・通信)に就任
「昭和8年雪解け期対ソ開戦」プラン
永田(情報担当第2部長)から 反対され 潰された

永田　鉄山(ながた・てつざん)
明治17(1884)～昭和10(1935)長野県生まれ。陸軍少将。大正2年ドイツ留学。10年スイス公使館付武官。13年陸大教官。陸軍省初代動員課長、軍事課長を歴任、昭和9年軍務局長となり、総動員体制の基礎を作る。統制派の中心と目され、皇道派相沢中佐に殺害される。死後中将

小畑　敏四郎(おばた・としろう)
明治18(1885)～昭和22(1947)高知県生まれ。陸軍中将。大正4年ロシア駐在。ロシア大使館付武官、参謀本部部長、陸大校長を歴任。二・二六事件後に皇道派として予備役。戦後、東久邇内閣国務相

岡村　寧次(おかむら・やすじ)
明治17(1884)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。関東軍参謀副長、参謀本部部長を歴任。昭和13年第11軍司令官。19年支那派遣軍総司令官

宇垣　一成(うがき・かずしげ)
明治1(1868)～昭和31(1956) 岡山県生まれ。陸軍大将。大正13年陸相となり軍縮を実施。4代の内閣で陸相を務め宇垣時代を築く。朝鮮総督を経て昭和12年1月、組閣の大命を受けたが、陸軍の反対で陸相を得られず断念。近衛内閣外相。戦後28年参院全国区に最高点当選

荒木　貞夫(あらき・さだお)
明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。陸大校長、第6師団長など歴任。精神主義的・反共主義的言動で皇道派の中心的存在に。昭和6年犬養内閣陸相となり、陸軍中枢を自派で固めた。二・二六事件で予備役。13年近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年仮出所

▽永田は「今は、まず満州を固めて、ソ連に手を出すべきではない」 軍務局長の昭和10年3月
外務省を助けて ソ連から
北満鉄道(満州里―ウラジオストック1700㌔)を 買収させた
▽ソ連も ウラジオ ハバロフスクに
満州国領事館 開設を認め(事実上の満州国承認)
日ソ間の緊張緩和に 役立ったが
小畑は「戦争すればタダで取れた」と 反対

●陸軍の国家革新運動には、別に二つのグループ
▽大正末からの 青年将校運動
▽北一輝の「日本改造法案大綱」(大正8年)
天皇の大権発動により 憲法の3年間停止
華族制度 貴族院を廃止し
100万円以上の 私有財産の禁止
▽革新熱に燃える 青年将校を 巻き込んでいった
ほとんどが 隊付 大尉以下の下級将校

末松太平大尉(弘前連隊、禁固4年)は話している

満州事変で出征した時、青森県下は冷害で凶作だった。ある兵隊が父親から受け取った手紙には「お前は必ず死んで帰れ。お前の死んだ後で国から貰える金がほしいのだ」とあった。こんな貧窮に泣く農村青年を部下に持つ将校が、ただ抽象的に軍人勅諭の忠節を部下に諭すだけで済ましておれるか。尽忠報国の義務だけあって、生活する権利さえ保障されていない兵隊に代わり、腐敗堕落の政界や財界、軍閥の権力者に反省を促すことは、軍人勅諭の具体的実践であるはずだ。

▽もう一つは 橋本欣五郎中佐の「桜会」(昭和5年9月)
ケマル・パシャの 軍事革命の成功を見て
日本でも 同じような革命を やろうとした

「三月事件」と「十月事件」

昭和6年3月、クーデターによる陸相の宇垣政権樹立を図ったが、宇垣が途中で中止を指示、失敗に終わった。10月には満州事変に呼応、荒木を担いで政権を奪おうとしたが、連日連夜、料亭で豪遊しては、青年将校に「成功したらこのポストにつけてやる」と檄を飛ばした。

真崎 甚三郎(まざき・じんざぶろう)
明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍司令官を経て昭和6年参謀次長。荒木と共に皇道派の指導的存在。9年教育総監に就任したが翌年更迭。二・二六事件で軍法会議、無罪

林 銑十郎(はやし・せんじゅうろう)
明治9(1876)～昭和18(1943) 石川県生まれ。陸軍大将。朝鮮軍司令官を経て昭和7年教育総監。9年斎藤内閣陸相。岡田内閣に留任、真崎教育総監を更迭。12年2月首相に就任。4ヵ月の短命内閣に

石原 莞爾(いしはら・かんじ)
明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、参謀本部作戦部長、京都師団長。東条と対立し16年予備役。立命館大教授となり東亜連盟運動を指導

閑院宮 戴仁親王(かんいんのみや・ことひとしんのう)
慶応1(1876)～昭和31(1956)陸軍大将・元帥。第1、近衛師団長を経て昭和6年参謀総長となり、15年まで在任した

富永 恭次(とみなが・きょうじ)
明治25(1892)～昭和35(1960)長崎県生まれ。陸軍中将。昭和18年陸軍次官となり、東条の腹心と言われた。19年比島の第4航空軍司令官。米軍上陸前に逃亡し予備役に。敗戦直前召集され、満州の第139師団長。シベリア抑留で30年帰国

武藤 章(むとう・あきら)
明治25(1892)～昭和23(1948)熊本県生まれ。陸軍中将。参謀本部作戦課長など歴任。昭和14年軍務局長となり、日独伊三国同盟、大政翼賛会結成を促進。19年第14方面軍参謀長。A級戦犯で刑死

橋本らが憲兵隊に検挙されると、クーデターに参加を予定していた青年将校は、「桜会は権力志向だ。態度も不真面目」と離れていった。

▽皇道派は 一番下に 青年将校抱える形で形成
荒木が 青年将校「期待の星」
荒木も 可愛がったし 真崎の陸士校長時代
その教えを受けた 青年将校が多かった

●青年将校と統制派幕僚の話し合いは決裂した
▽昭和8年11月 偕行社(将校クラブ)に
両派の中心人物が集まり 数回にわたり会談
▽武藤章たちが「青年将校は勝手に政治運動をやるな。お前たちの考えている国家の改造や革新は、自分たち中央の者がやる」
▽青年将校は「貴方方エリートには、
農山漁村の本当の苦しみは分からない」
▽最後は 統制派が
「今後、軍中央の方針に従わなければ断固取り締まる。政治活動をやるなら軍服を脱いでやれ」
▽青年将校は 統制派に 強い憎しみを抱いた
陸大を受験しない「エリート拒否」の盟約

●荒木の陸相辞職(昭和9年1月)で、皇道派全盛時代に翳り
▽後任陸相に林 真崎は 教育総監に
林は 比較的 無色だし 周りを
柳川平助(次官)ら 皇道派で固めておけば…
▽林は 軍務局長に 永田を起用(3月5日)
「反皇道派」色を 明らかにしていく
▽陸軍部内の暗闘が
「士官学校事件」で 初めて 国民の目に
▽昭和10年4月4日 突然 陸軍省発表
「昨年十一月中旬、在京青年将校および士官候補生若干名が、不穏の企図をなしあるやの疑いありしを以て、厳正調査のため軍法会議において関係者を取り調べたり」
▽嫌疑不十分で 不起訴処分になったが
「言動に軍紀上適当でないものがある」
村中孝次(陸軍大尉) 磯辺浅一(一等主計)ら 3人を停職
士官候補生 5人を 退学処分にした

北 一輝(きた・いっき)
明治16(1883)～昭和12(1937)新潟家生まれ。国家社会主義者。本名輝次郎。孫文と交わり、中国革命同盟会に参加。大正8年「日本改造法案大綱」を執筆、青年将校に大きな影響を与えた。二・二六事件指導者と見做され、軍法会議で刑死

橋本 欣五郎(はしもと・きんごろう)
明治23(1890)～昭和32(1957)岡山県生まれ。陸軍大佐。昭和2年から3年間トルコ駐在武官。5年参謀本部ロシア班長となり「桜会」を結成。三月事件、十月事件の首謀者。17年衆院議員。A級戦犯で終身禁固刑を受けたが、30年仮出所

ケマル・パシャ(kemal Pasha)
1881～1938 トルコ共和国初代大統領。帝政トルコを倒して近代化を進め、「アタチュルク」(父なるトルコ人)の称号を受ける

柳川 平助(やながわ・へいすけ)
明治12(1879)～昭和20(1945)長崎県生まれ。陸軍中将。次官を経て昭和10年台湾軍司令官。支那事変で第10軍司令官。興亜院総務長官、近衛内閣法相を歴任

高宮 太平(たかみや・たへい)
明治30(1897)～昭和36(1961)福岡生まれ。読売、朝日軍事記者を経て京城日報社長。著に「昭和の将帥」「米内光政」

高宮太平が書いている
林は4月、弟が東京市疑獄事件に連座、「大臣として道義的責任を感ずる」と辞表を出した。柳川次官は記者会見し「大臣は、実に崇高な見上げたお方だ。これをお引き止め出来ない」高宮が裏をとるため真崎を訪ねると、来客中。玄関脇の部屋に通され、待っている間に真崎、荒木の「林追い出し」の電話を聞いてし

「士官学校事件」とは

統制派の片倉衷少佐(参謀本部参謀)、辻政信大尉(士官学校生徒隊中隊長)は、士官候補生をスパイに使い、村中、磯辺を訪問させ、皇道派の動向を探った。昭和9年11月中旬、皇道派青年将校2、30人が東京市内の料亭で会合を開き、村中が席上、臨時議会開院式に一斉蜂起、政財界人を射殺、戒厳令を布いて軍政権を樹立する — このテロ計画を語ったとして、憲兵隊が22日早朝、村中、磯辺ら青年将校11人を検挙した、

▽村中 磯辺は「統制派が事件を捏造したのだ」
　7月11日 「粛軍に関する意見書」(110ページ)を配布
▽国民には 隠されていた
　「三月事件」「十月事件」を暴露
　「紙の爆弾」となり 陸軍 政財界に 大きな衝撃
▽陸軍省は 村中 磯辺を 免官処分(8月2日)

●二・二六の引き金、真崎教育総監更迭(昭和10年7月16日)
▽夕刊(18日)は 5段見出しで
　「陸軍部内に暗雲 教育総監更迭に真崎派強硬」
▽青年将校は あちこちで 会合を開き
　「教育総監更迭は統帥権干犯なり、永田を葬れ」
▽8月12日朝には 皇道派の相沢三郎中佐が
　軍務局長室で 永田を 軍刀で斬り殺した

●相沢の軍法会議(11年1月28日から)には大勢の青年将校
▽派手な公判闘争で「皇道派の思想」宣伝の場に
▽栗原 磯辺は
　「相沢のやったことこそ、自分たちがやるべきだった。公判闘争より、今こそ昭和維新断行を」
▽第1師団の「3月満州派遣」正式決定と共に
　クーデター計画が 具体化していった
▽部下を巻き込むことに 悩んでいた
　安藤輝三大尉も 2月22日 参加を決意
▽同夜 栗原中尉の家に 集まり
　野中四郎大尉が「蹶起趣意書」を 書き上げた
▽決行日時は 26日午前5時
　襲撃目標は リベラルな英米協調派の
　　政治勢力を一掃 兵力部署も 決定した

まった。しばらくして「これで全部ぶち壊しだ。新聞屋などを入れて…」
女中を投げ飛ばし、夫人にビンタの音に、高宮が飛んで行き「偶然聞いた話を記事にする積もりはない」「頼む。是非秘密にしてくれ」と土下座せんばかり。

村中　孝次(むらなか・たかじ)
明治36(1903)～昭和12(1937)北海道生まれ。陸軍大尉。皇道派の中心となり、昭和10年「粛軍に関する意見書」を配布し免官。二・二六事件首謀者として処刑

磯辺　浅一(いそべ・あさいち)
明治38(1905)～昭和12(1937)山口県生まれ。早くから北一輝の門に出入りし、青年将校運動の中心に。陸軍中尉の時、陸軍経理学校に入り一等主計。昭和10年免官。二・二六事件首謀者として処刑

片倉　衷(かたくら・ただし)
明治31(1898)～平成3(1991) 福島県生まれ。陸軍中将。昭和5年関東軍参謀、満州事変を画策。二・二六事件で統制派有力メンバーとして磯辺に狙撃され重傷を負う。20年高崎の第202師団長

辻　政信(つじ・まさのぶ)
明治35(1902)～昭和43(1968)石川県生まれ。陸軍大佐。昭和12年関東軍参謀となり、ノモンハン事件で強硬論を主張。第25軍参謀を経て17年参謀本部作戦班長。マレー上陸作戦、シンガポール攻略戦、ガダルカナル作戦を指導。シンガポールの華僑虐殺やバターン死の行進も辻の発案と言われる。バンコクで終戦。戦犯指名を恐れ僧侶に変装して逃亡生活を続け23年帰国。逃走記録「潜行三千里」はベストセラーに。27年衆院議員、34年参院議員。36年東南アジア視察中ラオスで消息を断ち、43年死亡宣告

●二・二六事件は、初めのうちは成功するかに見えた
▽陸軍上層部は 慌てふためくばかり
荒木 真崎の 意のままに 動き出した
▽石原莞爾大佐(参謀本部作戦課長)は
荒木の顔を見るなり「お前みたいな
馬鹿な大将がいるから、こんな事になるんだ」

●真崎は午前8時半、陸相官邸に現われた
▽胸に 勲1等旭日大綬章
「真崎内閣」に 期するものがあったのだろう
▽磯辺が 駆け寄り
「閣下、統帥権干犯の賊類を討つために
決起しました。状況をご存じでありますか」
「とうとうやったか。お前たちの心は
ようわかっとる、ようわかっとる。落ち着いて、
落ち着いて、宜しいように取り計らう」
▽川島に「こうなったら仕方がないじゃないか。
大勢だぜ。これで行こうじゃないか」
▽呆然としている川島を 叱りつけ 参内を勧めた
▽伏見宮(軍令部総長)邸で 加藤寛治(海軍大将)と落ち合い
「強力な内閣を作って事態収拾」を 進言した

●天皇は、伏見宮の「新内閣樹立」に取り合わなかった
▽参内した川島は「蹶起趣意書」を読み上げただけ
天皇は 厳然と「反乱軍を速やかに鎮圧せよ」
▽天皇が 蹶起部隊を 反乱軍と呼び
新内閣樹立を 拒否した時
二・二六事件の運命は 決まった

木戸(内大臣秘書官長)は湯浅(宮内相)と対応策

木戸は「この際、最も大事なことは、全力を反乱軍の鎮圧に集中することだ。後継内閣の組織に着手すれば、どうしても反乱軍寄りの内閣になり、反乱成功になりかねない」 湯浅が「暫定内閣という構想には、絶対ご同意されないように」と言上、天皇も全く同意見だった。

▽臨時首相代理には 後藤文夫(内務大臣)
▽後藤が 閣僚の辞表を纏めて 奉呈すると
天皇は「まず時局安定に尽力せよ。暴徒は全力
を挙げて鎮圧、辞表はしばらく預かりおく」

相沢 三郎(あいざわ・さぶろう)
明治22(1889)～昭和11(1936)宮城県生まれ。陸軍中佐。士官学校、戸山歩兵学校剣道教官(剣道4段)。歩兵第41連隊(福山)勤務の時、台湾に異動になり赴任途中、永田軍務局長を斬殺。軍法会議で死刑

野中 四郎(のなか・しろう)
明治36(1903)～昭和11(1036)青森県生まれ。陸軍大尉。父は陸軍少将。昭和9年歩兵第3連隊中隊長となり、最先任将校として二・二六事件に参加。29日反乱失敗の後、陸相官邸で自決した

「無定見」の見本・川島陸相

内田信也(鉄道相)は、川島を「陸軍という所は、あんなでも大将、大臣になれるのか。天下一品の愚物」
ただウロウロするだけ。青年将校が川島に「決行の趣旨を天聴に達せよ、蹶起部隊の警備隊編入」など8項目の要望書を読み上げている時、渡辺(教育総監)殺害の報告が入ってきた。川島が「皇軍相撃つはいかん」と叱ると、栗原から「あれは皇軍ではない」と怒鳴られ、「そうか、皇軍ではないか」と黙り込んでしまったという。

伏見宮 博恭王(ふしみのみや・ひろやすおう)
明治8(1875)～昭和21(1946) 海軍大将・元帥。海大校長、第2艦隊長官を経て昭和7年軍令部長。16年まで軍令部総長

加藤 寛治(かとう・ひろはる)
明治3(1870)～昭和14(1939) 福井県生まれ。海軍大将。海大校長、軍令部次長、大正15年連合艦隊司令長官。昭和4年軍令部長となりロンドン海軍軍縮条約に強硬に反対した。「艦隊派」の中心となり、5年軍事参議官

●軍事参議官会議は、午後1時半から宮中東溜の間で
▽会議を 終始 リードしたのは 荒木 真崎
▽川島が「勅命を仰いで各部隊を帰還させたい」
荒木は「それに先立って我々にはすることがある。軍事参議官が死を以て当たるから、お前たちは兵営に帰れ。こう説得するのが先決だ」
▽真崎も「左翼の警戒に全力を注ぐ必要があり、蹶起部隊をその警備に当てるようにすべきだ」
▽「陸軍大臣告示」を 出すことになり
山下奉文少将が 原文の「軍事参議官申合書」

●東京警備司令部は午後3時半、大臣告示を師団に伝達

陸軍大臣告示

一、蹶起ノ趣旨ニ就テハ天聴ニ達セラレアリ
二、諸子ノ行動ハ国体顕現ノ至情ニ基クモノト認ム
三、国体真姿顕現(弊風ヲ含ム)ノ現状ニ就テハ恐懼ニ堪エズ
四、各軍事参議官モ一致シテ右ノ趣旨ニヨリ邁進スルコトヲ申シ合セタリ
五、コレ以上ハ一切大御心ニ俟ツ

▽山下が 青年将校に 伝えに行く時
真崎は「いいか、叱っちゃいかんぞ。穏やかに、すぐ帰れと諭せ」山下も 3回も読み上げた
▽青年将校は「我が事成れり」と 歓喜した
陸軍上層部は 一致して後押しと 受け取った
▽夜10時25分には 蹶起部隊の「警備隊編入」命令
第1師団長の指揮下に入れ「麹町地区警備隊」

●事態は、少しずつ変わりつつあった
▽石原(作戦課長)は 最初から「断乎鎮圧」の強硬論
杉山元(参謀次長)も 討伐を支持した
▽夜になって「大臣告示第二項の『諸子ノ行動』はおかしい」の 声が出た
▽川島の持っていた原文では「諸子ノ真意」
▽大臣告示は「真意」に 訂正されたが
この違いは 重大だった
▽「真意」なら「その精神は」ということだが
「行動」なら 襲撃の事実を 認めたことになる

後藤 文夫(ごとう・ふみお)
明治17(1884)～昭和55(1980)大分県生まれ。警保局長、台湾総督府総務長官を歴任、昭和7年斎藤内閣農相。9年岡田内閣内相となり、二・二六事件で臨時首相代理。18年東条内閣国務相。公職追放解除後、28年に参院議員

山下 奉文(やました・ともゆき)
明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生まれ。陸軍大将。航空総監を経て昭和16年第25軍司令官となりシンガポールを攻略。第1方面軍司令官ののち19年比島第14方面軍司令官。戦後、マニラで処刑

東京警備司令官告示

「本朝来出動シタル諸隊ハ戦時警備部隊ノ一部トシテ新ニ出動スル部隊ト共ニ師管内ノ警備ニ任ゼラレタルモノニシテ、軍隊相互間ニ於テ絶対ニ相撃ヲナスベカラズ」

蹶起部隊は「官軍」なった

亡くなった落語家・柳家小さん師匠は、昭和11年の新年早々徴兵され、麻生の第3連隊に入営、事件に巻き込まれた。「連隊から食事も運ばれてくるし、まさか、反乱軍とは思ってもいなかった。それが二日目の夕方から、食料がピタリと止まり、おかしいとは思ったが、とにかく腹が減って仕方なかった」と話している。

杉山 元(すぎやま・はじめ)
明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍大将・元帥。陸軍次官、参謀次長、教育総監歴任。昭和12年近衛内閣陸相となり、支那事変拡大を支持した。15年参謀総長。小磯内閣陸相を経て20年、本土決戦に備えた第1総軍司令官。敗戦翌月、ピストル自決。「杉山手記」を遺す

▽しかも「天聴ニ達セラレアリ」
天皇の耳に達したことは 天皇も 認めたことに

●あり得ない間違い、すり替えは、どこで起こったか
▽大臣告示を 宮中から 電話で伝えたのは
東京警備司令官 香椎浩平中将(のち戒厳司令官)
▽電話で受けた 東京警備司令部参謀長は
「二度復唱し、それを脇で聞いていた参謀が
筆記したのだから、絶対間違いない」
▽高宮記者は「皇道派寄りの香椎の読んだものが、
間違っていたのだ。それも、山下の書いた最初
の原案が、行動となっていたからだ」

NHK「二・二六事件秘録 消された真実」

軍法会議で主席検察官を務めた匂坂春平(さきさか・しゅんぺい)の新資料に基づいて、昭和63年に放送された特集番組。それによると大臣告示は、近衛師団では東京警備司令部が伝達した午後3時半より4時間40分も早く午前10時50分に受け取っていた。軍事参議官会議が開かれる前、山下原案が出来ていて、流されたことになる。

●真崎は戦後、盛んに「無関係」と弁解したが…
▽襲撃30分前 午前4時半には
皇道派出入りの亀川哲也が 知らせていた
▽亀川の証言によると
「真崎は死人のような顔色になり、残念だ、今ま
での苦労が水泡に帰した。万事休すだ」
▽相沢初公判の日 借金を申し込んだ磯辺に
「何事か起こるなら、何も言ってくれるな」
▽21日には 亀川から「蹶起の気運迫る」
近く暴発することは 確実に 知っていた
▽陸相官邸に 現われるまでの4時間
陸軍省にも 憲兵隊にも報せず 何をしていたか
▽はっきりしているのは 加藤大将に電話して
伏見宮を動かすため 伏見宮邸で落ち合うこと
▽陸軍省から 呼び出しが かかると
「腹痛で寝ていたが、事件が起こった以上、
すぐ行く」 まるで 初耳のように
アリバイ工作までして 陸相官邸へ

軍事参議官会議のやりとりは

杉山参謀次長の手記によると、天聴云々は必要ないとの意見が多かったが、真崎が「それを入れなければ到底説得出来ない」と言って残された。真意も、最初は至誠だったが、異論が出て真意に改めた。行動という言葉は、終始一回も出なかった。

香椎 浩平(かしい・こうへい)
明治14(1881)～昭和29(1954)福岡県生まれ。陸軍中将。支那駐屯軍司令官を経て昭和10年東京警備司令官。二・二六事件で戒厳司令官を兼務したが、反乱軍に対し同情的で、鎮圧を長引かせた。事件5ヵ月後、皇道派寄りとして予備役に

真崎の弁解(昭和32年4月・特集文春)

私は世間で想像するほど二・二六事件に関係もなければ、むしろ事件が突発するまで、かかる無謀な計画が立てられていたことを全然知らなかっただけに、私にはあの朝の事件突発の報は、まったく寝耳に水であった。しかるに実に手回しよく、事件突発するや、その背後に真崎ありと宣伝し、世間はおろか、宮中までもかく信ぜしめたのであった。彼の一年三ヵ月にわたる軍法会議において、徹底的に調査せられて何事もない。もし少しでも関係があったら、私は決して助からなかった。(死後、公開された手記)

亀川 哲也(かめかわ・てつや)
明治24(1891)～没年不詳 沖縄県生まれ。国家主義者。昭和8年大日本農道会を組織し相沢公判に活動。二・二六事件に際して、昭和維新政権樹立を目指し、政界上層部に働き掛けた。検挙され、無期禁固

●海軍は、「断乎鎮圧」の方針をとった
▽大角海相は 皇道派寄り
煮え切らない態度だったが 鎮圧に纏めたのは
横須賀鎮守府の米内光政(長官) 井上成美(参謀長)
▽井上は 巡洋艦木曽を 芝浦沖に回航させ
26日午後3時には 陸戦隊を 海軍省に入れた
▽米内に「万一の場合、陛下を戦艦比叡に乗艦願い、
長官が全艦隊の指揮をとられるべきでしょう」
▽軍令部も 正午 宿毛(土佐)沖で演習中の
連合艦隊に「第一艦隊は東京湾、
第二艦隊は大阪湾に急行せよ」と 緊急指令
▽27日午後4時 40隻が お台場沖に
旗艦長門など 砲門を 国会議事堂に向けた

●27日午前3時半、緊急勅令で東京全市に戒厳令布告
▽「武力鎮圧」の姿勢を示した 戒厳令だった
佐倉 甲府 水戸 宇都宮の連隊を 上京させた
▽天皇は 2、30分ごとに 本庄繁(侍従武官長)を呼び
「鎮圧はまだか」26日だけでも 13回も

「昭和天皇独白録」から

討伐命令は軍系統限りでは出せない、政府との諒解が必要であるが、当時岡田首相の所在が不明なのと且又陸軍省の態度が手緩かったので、私から厳命を下した訳である。
私は田中内閣の苦い経験(張作霖爆殺事件で田中首相を叱責、総辞職した件)があるので、事をなすには必ず輔弼の者の進言に俟ち又その進言には逆はぬ事にしたが、この時と終戦の時との二回丈けは積極的に自分の考を実行させた。

▽青年将校は 本庄(山口一太郎大尉が女婿)を通じての
宮中工作に 期待をかけたが
「本庄日記」は 天皇怒りの言葉を 記録している

●青年将校にも、焦りが出て来た
▽27日午後2時 軍事参議官に
「事態収拾を真崎大将にお願いしたい」
▽真崎は すでに 撤退を考えていた
「収拾の道は原隊復帰にあるのみだ。軍事参議官
には収拾の職権がない」幻滅の唇を噛んだ

米内 光政(よない・みつまさ)
明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和10年横須賀鎮守府長官、11年連合艦隊長官。12年林内閣海相となり、近衛、平沼内閣に留任。15年1月首相に就任したが日独伊三国同盟に反対したため陸相が辞職、7ヵ月で総辞職。19年現役に復帰し小磯内閣相。鈴木内閣にも留任し、終戦和平に尽力した

井上 成美(いのうえ・しげよし)
明治22(1889)～昭和50(1975)宮城県生まれ、海軍大将。戦艦比叡艦長を経て昭和10年横須賀鎮守府参謀長。軍務局長、航空本部長、第4艦隊長官を歴任し17年海兵校長、英語教育を貫く。19年海軍次官に就任、米内を助け終戦和平に尽力

本庄 繁(ほんじょう・しげる)
明治9(1876)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。陸軍大将。昭和6年関東軍司令官、満州事変を指揮した。8年侍従武官長。敗戦後、自決した。遺稿に「本庄日記」

「本庄日記」から

(27日)将校の行為はもとより許すべからざるものなるも、その精神に至りては君国を思うに出でたるものにして、必ずしも咎むべきにあらずと申し述べるところありしに、のちお召しあり。朕が股肱の老臣を殺戮す。かくの如き将校ら、その精神において何の恕すべきものありやと仰せられ…。
なおまたこの日、陛下には陸軍当路の行動部隊に対する鎮圧の手段進捗せざるに焦慮せられ、武官長に対し、朕自ら近衛師団を率い、これが鎮圧に当たらんと仰せられ真に恐懼に耐えざるものあり。

●28日午前5時、ついに「奉勅命令」が出た

奉勅命令

(28日)戒厳司令官ハ三宅坂付近ヲ占拠シアル将校以下ヲ以テ速ニ現姿勢ヲ撤シ各所属部隊ノ隷下ニ復帰セシムベシ

▽三宅坂に 留まっているだけで
　勅命に反した 逆賊になるが
　　この日1日 事態は 変わらなかった
▽香椎(戒厳司令官)が「皇軍相撃つを回避する」と
　命令の実施を 引き延ばした
▽青年将校は 3日間 ほとんど 一睡もしていない
　安藤 磯辺の「徹底抗戦論」と
　村中 栗原の「自決あるいは撤退論」が渦巻いた
▽栗原が「自決するから勅使を派遣してほしい」
　川島 山下は 28日午後1時 本庄を訪ねた
▽天皇は「自殺するなら勝手になすべく」
　「直ちに鎮定すべく厳達せよ」と 厳命した

●戒厳司令部は28日午後11時、討伐命令に踏み切った
▽「29日朝攻撃開始」戦車を先頭に
　2万の部隊が 包囲網を 狭めていった
▽「勅命下る 軍旗に手向かふな」の アドバルーン
　空からは 飛行機が「オ前ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオル」ビラを撒いた
▽ラジオは繰り返し「兵に告ぐ」を 放送した
　「勅命は発せられたのである。すでに天皇陛下のご命令が発せられたのである。今からでも決して遅くないから、直ちに抵抗を止めて軍旗の下に復帰せよ」 兵隊は 動揺した
▽将校たちは「ここで兵を殺すには忍びない」
▽首相官邸占拠部隊から 帰順が始まり
　午後2時頃までに 下士官 兵は 兵営に戻った
▽将校は 陸相官邸に集まり 野中大尉が自決
▽残りの将校 村中 磯辺は
　「法廷闘争で自分たちの主張をしよう」
　　代々木の 陸軍刑務所に 収容された
▽戒厳司令部は 29日午後3時「反乱鎮定」を発表
▽牧野伸顕(前内大臣)を襲撃 護衛警官に撃たれ
　重傷を負った 河野寿大尉は 入院先で自決

磯辺は悔しがった

獄中の手記に「真崎にダニのように食い付いて、脅迫、扇動、どんな手段をとってもいいから、離れねばよかった」

「本庄日記」から

(28日) この日午後一時、川島陸相および山下奉文少将、武官室に来たり、行動将校一同は大臣官邸にありて自刃、罪を謝し、下士以下を原隊に復帰せしむ。ついては勅使を賜り死出の光栄を与えられたし、これ以外解決の手段なし、また第一師団長も部下の兵を以て部下の兵を討つに耐えずとなせる旨語る。繁はかかることは恐らく不可能なるべしと躊躇せしもせっかくの申し出につき一応伝達すべしとて、右、陛下に伝奏せしところ陛下は非常なる御不満にて、自殺するならば勝手になすべく、かくの如きものに勅使などもってのほかなりと仰せられ、また師団長が積極的に出ずるにあたわずとするは、自らの責任を解せざるものなりと、いまだかつて拝せざる御気色にて厳責あらせられ、直ちに鎮定すべく厳達せよと厳命をこうむる。

麦屋清済少尉(無期禁固)の話

やたらと「自決しろ」と言ってくる。便所の窓からひょっと外を見ると白木の棺桶がたくさん積んである。戻ると第3連隊長が「お前、何も言わないでここで自決しろ」死人に口なしにしたいのだと、「自決してはいけない」と思った。

牧野　伸顕(まきの・のぶあき)

文久1(1861)～昭和24(1949) 鹿児島生まれ。大久保利通の二男。宮内相を経て大正14年内大臣。二・二六事件で襲撃され、難を逃れる。吉田茂首相は女婿

●襲撃計画だけがあって、事後の計画がなかった
▽「君側の奸」さえ除けば 真崎 本庄が動いてくれ
「皇道派中心の維新政府」と 漠然と 期待した
▽磯辺 栗原は 宮城占領も 考えていたが
若い将校は「天皇に弓を引く形の行動、
天皇に強要するような事は出来ない」と反対
▽3月4日 緊急勅令で 特設軍法会議設置
非公開で 法廷闘争の夢も はかなく消えた
▽陸軍は 北一輝 西田税の民間人を 首謀者にし
反乱の原因を「純真な青年将校が踊らされた」
▽7月5日 初公判から わずか69日で
17人に死刑判決 1週間後 将校15人は銃殺に

竹嶌継夫中尉(28歳)の遺書

あてにもならぬ人の口を信じ、どうにもならぬ世の中で飛び出してみたのは愚かであった

▽磯辺 村中 北 西田 4人は 12年8月19日処刑
▽北は「若殿に兜とられて負けいくさ」
面会に来た弟に
「この事件に何ら関係ない。しかし私の本を愛読していた連中がやったので、もし無罪放免になっても、ほかの諸君の後を追って自決する」
▽「反乱を利す」罪で 起訴された真崎は
12年9月25日「証拠不十分」で 無罪判決
▽陸軍省は「これで二・二六事件の処理は
全て終わった」と 発表した
▽真に 問われるべきは 陸軍の体質だった
張作霖爆殺事件に始まり 満州事変 上海事変
三月事件 十月事件 多くの謀略を 不問にし
五・一五事件の被告を「正義の士」扱い

特設軍法会議

通常の師団の軍法会議と違い、戦地または戒厳令下に設けられ、非公開、上告なしの一審制、弁護人なし。陸相が判士、検察官を任命、大臣の命令で動く行政機関の裁判のようなもの。

西田　税(にしだ・みつぎ)

明治34(1901)～昭和12(1937)鳥取県生まれ。大正14年、騎兵少尉の時に病気で予備役。北一輝の門下に入り、青年将校に北思想を鼓吹。二・二六事件で刑死

判士・藤室良輔中佐の見解

「真崎大将が反乱の指導者であったという証拠はない。しかしながら多くの主犯青年将校たちは、各自何回となく真崎大将を訪問し、革新運動に関して、精神的に鼓吹されていることは明白になっている。軍はそもそも精神団結の機構である。仮令暗示にもせよ、精神上の感化は軍人の行動を律する根源である。運動資金を与えたか否かをもって、証拠の有無を論ずるが如きは末である。軍事参議官が、反乱の関係において罰せられるならば、軍は国民の間に信を失い、その権威を問われるであろう。しかしそれは一時の恥、一時の損であり、やがて回生の礎となるであろう。この軍自体の精神的罪科を不問に付して、部外の小革命家を極刑に処するが如き不公平は、決して国民の信を繋ぐ所以でないのみならず、今日の弊は、明日の弊を倍し、軍紀の粛正は、永久に不能となるであろう」